

# 世界遺産登録に向けて

## 絵図から見えること(II) — 下戸夕照 —

下戸村は、相川市街地の南端部に位置し、古くは「折戸」とも表記されてきました。元は羽田村の一部で慶長5（1600）年の検地の際に分村したとされ、地名の由来は、「オリト」という羽田村の農家の娘が、この地に嫁いできたことによるとの説もあります。

開発当時の下戸村は、北は大仏川、南は海士町川に挟まれた沼地でしたが、羽茂飯岡から十二権現を勧請した永享12（1440）年頃から羽田村の人々が中心となって新田畑を開発してきました。

相川金銀山の開発に伴い、下町の町立てが進む寛永6（1629）年には、下戸村に続いて下戸町ができ、元禄年間（1688〜1704年）までの間に下戸炭屋町・下戸炭屋裏町・下戸炭屋浜町などが開かれていきます。ちょうど二・三町目から下戸町にかけて砂浜が広くなった時期と重なります。

この頃、浜から吹き寄せられる飛砂を防ぐ松並木が整備されたのでしようか。およそ50年後に描かれた「相川八景」には、「下戸の松も臍

おりとせきしよう

なる」とあり、「山ならて 波に 入日の影うすく 下戸に立てる松は 久しき」と詠まれています。

◆市役所世界遺産推進課

（金井就業改善センター内）

☎63—5136



下戸町と田植を終えた田町付近の風景  
(大正10年前後)



山尾定政筆「相川八景 下戸夕照」

## おいしいイカはいかが？

今年に入り、日本海側でダイオウイカが次々と定置網にかかったり、浜に打ち上げられたりしています。

平成26年4月1日現在、捕獲されたダイオウイカ10匹のうち、6匹が佐渡沖で捕獲されました。

ダイオウイカは水温6度から10度ほどの深海に生息し、小笠原諸島沖など温帯海域を好みます。日本海には、水深300メートルの深さに「日本海固有水」と呼ばれる水温0度から1度ほどの冷たい水の層があるため、水深200メートル付近に上があればダイオウイカは生息できるとみられています。

私たちが日頃食べているスルメイカ（マイカ）も暖かいところが好きで、日本海を暖流に乗って移動します。春から秋にかけて東シナ海から日本海を暖流に乗って北上し、北海道の稚内付近まで移動します。そして十分に成長したイカは秋から冬にかけて南下し、生まれた海域に戻って産卵します。

イカは暖かい暖流には乗りますが、冷たい寒流には乗りません。佐渡島は、温かい暖流と冷たい寒流がぶつかる場所に位置しているため、佐渡沖で多く水揚げされるのです。



佐渡ジオパーク

## ジオパーク、推進日記

37



泳ぐイカ

もし、寒流と暖流がぶつかる場所であれば、イカたちは暖流に乗って佐渡沖を通過していつてしまい、私たちが食べるイカの量も少なくなっていたかもしれません。

6月が水揚げの最盛期となるスルメイカのほか、佐渡ではヤリイカやソデイカなども水揚げされ、島民にとつて最も身近な存在です。佐渡の夏の風物詩である「漁火」を眺め、イカたちが暖流に乗っている姿を想像しながらイカを噛みしめてみてはイカがでしょう。

◆教育委員会社会教育課

ジオパーク推進室(佐渡博物館内)  
☎52—2447

